

## ‘‘With Good Luck’’ : Belief in good luck and cognitive planning

Liza Day, John Maltby

Personality and Individual Differences, July 2005, Vol. 39, Pages 1217-1226

### Introduction

- 運を信じることは、自尊心、ギャンブル行動、人生のポジティブ・ネガティブな出来事の認識と関連することが示されている (Wiseman, 2004)。
- 運を信じることについて、伝統的に 2 つの心理学的説明がある：
  - ① 運を社会的事象の中の外的で不安定な要因と見なすものである (Rotter, 1966; Weiner et al.)。ここでは、運を信じることは制御不能であり、将来の期待にほとんど影響を与えないと考えられている。
  - ② 運を信じることを個人の属性とみなし、内的で安定した因子とみなすものである (Darke & Freedman, 1997a)。
  - ③ 一つ目の説明を支持する研究の多くは、帰属理論の文脈で行われ、外的帰属（出来事が運によるものとみなす）を行う個人は、精神的健康度が低いことを示している。
  - ④ 二つ目の説明（内的で安定した属性としての運）を支持する研究者は、人々が自分自身を幸運だと考えるか不運だと考えるかを区別し、幸運であるという認識はより高い精神的健康度と関連し (Darke & Freedman, 1997a, 1997b; Taylor & Brown, 1988)、不運という認識はより低い精神的健康度と関連している (Ellis, 1971, 1973; Rotter, 1966; Seligman, 1975)。
- 幸運を信じることは、適応的なプロセスと見なされている。
  - ① 個人が将来の期待をほとんどコントロールできない状況であっても、幸運にまつわるポジティブな幻想が、自信、コントロール、楽観主義の感情をもたらすことを示唆している (Darke & Freedman, 1997a, 1997b; Taylor & Brown, 1988)。
  - ② この評価の一環として、Darke と Freedman (1997b) は、幸運に対する信念を測定し、12 項目の幸運に対する信念尺度を開発した。幸運に対する信念が適応的であるという考え方は、幸運に対する信念尺度の得点が、統制の所在および楽観主義と正の相関を示し (Darke & Freedman, 1997a, 1997b)、抑うつおよび

不安と負の相関を示すことを示唆する研究によって支持されている (Day & Maltby, 2003; Day, Maltby, & Macaskill, 1999)。

- Day and Maltby (2003) は、特性的楽観主義 (Dispositional optimism) (ポジティブな将来予測とポジティブな対処戦略を測定する特性認知変数 Scheier & Carver, 1985) が、幸運への信念と精神的健康度との関係を媒介することを見いだした。
  - ① 幸運を信じることは楽観的な対処戦略と精神的健康の向上につながる特性的行動を構成することが示唆された。この知見は、幸運を信じるのが自信、コントロール、楽観の感情につながる肯定的な錯覚を生み出すという見解を支持するものとなっている (Darke & Freedman, 1997a, 1997b; Taylor & Brown, 1988)。
- 楽観主義に加えて、希望の理論 (the theory of hope) (Snyder et al., 1991) も幸運の信念をさらに理解するための心理学的モデルを提供する可能性がある。希望は、将来の目標を達成することに関する 2 つの認知過程からなる目標関連認知過程である (Babyak, Snyder, & Yoshinobu, 1993; Cheavens, Gum, & Snyder, 2000)。
  - ① 主体性 (Agency) とは、個人が目標に向かって進む意欲を自覚している度合い (例: 「私は精力的に目標を追求している」)
  - ② 目標に到達するための実行可能な経路を生み出す能力 (例: 「どんな問題でも回避する方法はたくさんある」)
- 本研究では、幸運を信じることと、希望および楽観の関係を調べることを目的とする。幸運を信じることは、楽観主義および希望と有意な正の相関を持つことが予測される。

## 2. 研究 1

- Method
  - ① 回答者  
英国ミッドランドにある大学の社会科学系学部生 222 名 (男性 108 名, 女性 114 名) にアンケートを実施した。回答者の年齢は 18 歳から 30 歳 ( $M = 20.51$ ;  $SD = 2.0$ ) であった。
  - ② BIGL 尺度 (Darke & Freedman, 1997b) は、12 項目から構成されている。回答は、強く反対と強く賛成を軸とした 6 点満点で採点される。この尺度のスコアが高いほど、幸運を信じる度合いが高いことを示す。
  - ③ Life Orientation Test-Revised, LOT-R (Scheier, Carver, & Bridges, 1994) は、4 つのフィラー項目、3 つのポジティブワード項目、3 つのリバースコード項目からなる 10 項目の尺度である。回答者は、不確実な時には、通常、最善を期待する」などの文に対する同意の度合いを、強く同意しないから強く同意するまでの 5 段階の回答尺度で表す。
  - ④ Trait Hope Scale (Snyder et al., 1991)。この尺度には、希望の構成要素を測定する 2 つの下位尺度がある。4 項目からなる主体性 (Agency) 下位尺度は、個人が自分の目標に向かう動機をどの程度持っているかを測定する (「私は精力的に目標を追求する」)。4 項目からなる経路尺度は、目標達成に支障のな

い状況でも支障のある状況でも、目標への実行可能な経路を生み出す能力の程度を測定する（「どんな問題でも回避する方法はたくさんある」）。回答は 8 段階のリッカート尺度で採点され、得点が高いほど、希望のレベルが高いことを示す。

# ● 結果

Table 1

Cronbach's alpha and mean scores for all the scales by sex (Study 1)

	$\alpha$	Male ( $n = 108$ )		Female ( $n = 114$ )		$t$
		$M$	$SD$	$M$	$SD$	
Belief in Good Luck	.72	38.80	8.5	37.46	9.7	1.08
Optimism	.75	20.25	3.8	20.09	4.3	.30
Hope agency	.82	22.61	4.3	23.50	4.2	-1.55
Hope pathways	.81	23.79	3.9	22.87	4.2	1.68

- ① 表 1 は、すべての尺度の性別による平均点と標準偏差を示したものである。今回のサンプルでは、いずれの尺度の得点にも性別差は認められなかった。

Table 2

Pearson product moment correlation coefficient between all the variables (Study 1)

	$n = 222$			
	1	2	3	4
1. Belief in Good Luck	—	.28**	.36**	.33**
2. Optimism		—	.27**	.54**
3. Hope agency			—	.40**
4. Hope pathways				—

\*\*  $p < .01$  (2-tailed).

- ② 表 2 は、すべての変数の間で計算された相関係数を示している。すべての変数が統計的に有意な正の関係を共有している。

Table 3

Standardised regression with Belief in Good Luck as a dependent variable and optimism, hope agency and hope pathways used as predictor variables (Study 1)

	$n = 222$		
	$B$	$B$	$sr^2$
<i>Belief in Good Luck</i>			
1. Optimism	.28	.12	
2. Hope agency	.58	.26	.07**
3. Hope pathways	.35	.16	.03*

$r^2 = .18$ ,  $Adj r^2 = .17$ ,  $r = .43$

\*  $p < .05$ .

\*\*  $p < .01$  (2-tailed).

- ③ すべての測定値間に統計的に有意な正の相関があることから、重回帰を行い、幸運を信じることを従属変数とし、楽観主義と希望の変数を予測変数として使用した。希望主体性および希望経路の下位尺度の得点は、幸運に対する信念の得点の固有分散を説明した。

- 研究 1 についての考察

- ① 本結果は、幸運を信じることは希望と相関しており、希望の両次元は幸運を信じるスコアを予測することを示唆する。さらに、楽観主義は幸運に対する信念と有意な正の相関があるが、幸運に対する信念を予測しないことが分かった。
- ② 幸運を信じている人は、他の人よりも目標達成を試みる傾向が強く、障害に直面しても忍耐強いと報告していることも示唆している。
- ③ 研究 2 の目的は、幸運を信じるのが、人々の目標達成への自信の有意な予測因子であるかどうかを検証することである。

### 3. 研究 2

- Respondents

- ① 英国ミッドランドにある大学の社会科学系学部生 96 名（男性 45 名、女性 51 名）にアンケートを実施した。回答者の年齢は 20 歳から 35 歳（ $M = 21.31$ ;  $SD = 3.1$ ）であった。

- Procedure

- ① 回答者には、次のような指示を行った。

「Think about something that you want to achieve in the future; namely a goal in life. This goal should be a real and important achievement, which you are hoping to achieve, and it should be a real ambition of yours. Now think about the possibility of achieving this goal and the different things that may need to happen for you to succeed and rate the following statements. 」

「将来達成したいこと、すなわち人生の目標について考えてみてください。この目標は、あなたが達成したいと望んでいる現実的で重要なことです。次に、この目標を達成する可能性と、成功するために必要なさまざまな事柄について考え、以下の項目を回答してください。」

- ② 回答者は 12 の質問をされ、すべて (1) 強く反対から (5) 強く賛成までの 5 点満点でスコア化された。最初の質問は、回答者が目標を達成する自信 (I will achieve this goal) を評価するためのものである。
- ③ 2 つ目の質問は、回答者の目標達成に向けた取り組み意向 (I will need to do at least some work to achieve this goal) を測定するためのものであった。
- ④ 次の 4 問は、前述のシナリオにおける具体的な目標への実行可能なルートを生み出す能力を測定するための希望経路の項目である。（「Even if I get stuck, I can think of many ways to getting my goal」、 「There are lots of ways to pursue this goal」、 「I can think of many ways to get this goal」、 「Even if I get discouraged, I know I can find a way to get this goal」 ）。

- ⑤ 次の4問は、前述のシナリオにおける具体的な目標に向かう意欲の知覚を測定するための希望主体性の項目である（[I will need to energetically pursue my goal], [My past experiences will prepare me well for achieving this goal], [My past experiences will help me be successful in achieving my goal], and [I will meet the goal that I set for myself]）。
- ⑥ 最後の2問は、「[I will need a certain amount of good luck to achieve this goal and To achieve this goal], [there may need to be some good luck involved, so that things go my way]」という、前述の目標を達成するために必要な幸運への信念を中心とした質問である。

## ● 結果

Table 4  
Cronbach's alpha and mean scores for all the scales by sex (Study 2)

	Male ( <i>n</i> = 45)	Female ( <i>n</i> = 51)	<i>t</i>
1. Anticipated Achievement of Goal	4.13 (0.6)	4.24 (0.6)	-.78
2. Need Good Luck	3.13 (1.2)	2.82 (0.9)	1.49
3. Good Luck and things to go way	3.20 (1.0)	3.06 (0.9)	.74
4. Need to do some Work	4.53 (0.5)	4.71 (0.4)	-1.75
5. Hope agency (Adapted)	16.47 (2.1)	15.41 (1.5)	2.91**
6. Hope pathways (Adapted)	14.80 (1.9)	13.76 (2.4)	2.33*

\*  $p < .05$ .

\*\*  $p < .01$  (2-tailed).

- ① 表4は、すべての尺度の性差による平均点と標準偏差を示したものである。今回のサンプルでは、希望主体性、希望経路の両尺度の得点に性別差が認められ、男性の方が女性より統計的に有意に高い得点であった。

Table 5  
Pearson product moment correlation coefficient between all the variables (Study 2)

	<i>n</i> = 96					
	1	2	3	4	5	6
1. Confidence in Achievement of Goal	–	.43**	-.23*	.21*	.45**	.46**
2. Need Good Luck		–	.74**	.04	.25*	.19
3. Good Luck and things to go way			–	.04	.32**	.12
4. Need to do some Work				–	.38**	.26**
5. Hope agency (Revised)					–	.48**
6. Hope pathways (Revised)						–

\*  $p < .05$ .

\*\*  $p < .01$  (2-tailed).

- ② 表5は、すべての変数の間の相関係数を示している。幸運の必要性変数が有意な負の関係がある以外は、すべての変数が目標達成の自信と統計的に有意な正の相関があった。幸運と希望の下位尺度の両方は、それぞれのパートナー変数と統計的に有意な正の関係を共有し、本研究におけるこれら2つの変数のセットの同時検証性を示唆している。さらに、幸運への信念の両側面は、希望主体性とは有意な正の相関があるが、希望経路や何らかの仕事をする意図とは有意な相関を持たなかった。

Table 6

Standardised regression with Confidence in Completion of Goal used as a dependent variable and optimism, hope and good luck variables used as predictor variables (Study 2)

	<i>n</i> = 222		
	<i>B</i>	<i>B</i>	<i>sr</i> <sup>2</sup>
<i>Anticipated Completion of Goal</i>			
1. Need Good Luck	-.39	-.62	.38**
2. Good Luck and things to go my way	.24	.34	.12**
3. Need to do some Work	.35	.27	.07**
4. Hope agency	.08	.22	.05*
5. Hope pathways	.10	.35	.12**
<i>r</i> <sup>2</sup> = .53, <i>Adj</i> <i>r</i> <sup>2</sup> = .50, <i>r</i> = .72			

\* *p* < .05.

\*\* *p* < .01 (2-tailed).

- このように、すべての指標に有意な正の相関があることから、目標達成の確信度を従属変数とし、何らかの作業をする必要性、希望、幸運の必要性を予測変数として、重回帰分析を行った。幸運の変数と目標達成の自信と負の相関があった。

#### 4. ディスカッション

- 研究 1 の結果は、幸運を信じることがポジティブな目標志向の行動と関連していることを示唆している。
- 研究 2 は、人々が目標を計画する際に、幸運に対する信念が重要な要素として捉えられることがあり、そのように、目標に向かって努力する意図や目標達成に関する自身の能力やモチベーションと同様に重要な要素として捉えられる可能性があることを示唆している。
- これらの知見により、幸運を信じることは、目標を計画する際の認知に関与している可能性が示唆される。
- 今回の結果は、幸運への信念と目標達成への自信の間にダイナミックな関係があることを示唆している。幸運を信じることは、目標達成に対する自信と常に正の相関があると仮定したが、今回の結果は、幸運を信じるのが逆の形でプロセスに関与している可能性を示唆している。「この目標を達成するためには、物事が自分の思い通りになるような幸運が必要かもしれない。to achieve this goal, there may need to be some good luck involved, so that things go my way」という項目は、目標達成の自信と正の相関を示し、「この目標を達成するためには、ある程度の幸運が必要だ。I will need a certain amount of good luck to achieve this goal」という項目は、目標達成の自信と負の相関を示したのである。この違いは、他の調査結果（幸運を信じる 2 つの文は高い正の相関を示し、希望主体性尺度と同程度の有意な正の相関を示した）との関連で、目標達成のスキーマにおける幸運の使い方に微妙な違いがあることを示唆している。
- この発見には、2 つの説明がある。
  - ① 本研究では、従属変数が目標達成の自信である。したがって、前者は運をコントロール可能な内的属性として捉えているのに対し、後者は運をコントロール不可能な外的属性として捉え、より悲観的な発言として捉えている可能性がある（この目標を達成するためにはある程度の運が必要）。このことから、幸運をより内的でコントロール可能な属性と考えるか、外的でコントロール不可能な属性と考えるかで、目標達成の自信に差が出ることが示唆された。

- ② 1 つ目の項目は「運が必要である」という考え方を中心に展開されているのに対し、2 つ目の項目は「運が必要であるかどうか」を中心に展開されていると解釈することができる。したがって、1 つ目の項目は、その目標が特に困難であり、大量の運がなければ達成できないという信念を反映しているのかもしれない。また、2 つ目の項目では、運が必要かもしれないが、運がなくても目標を達成できると考えているのかもしれない。
- 今回の結果は、幸運を信じることが適応的であり、目標志向の希望と関係があることを示唆している。さらに、幸運を信じることは、個人が目標に向かって努力するときに使われる認知スキーマの一部である可能性も示唆された。
- 幸運が果たす役割は、幸運を内的属性と見るか外的属性と見るか、意識的思考プロセスと現実的思考プロセス、あるいは実際に必要と認識されるかどうかによって依存する可能性があることを示唆している。